



文部科学省IB教育推進コンソーシアム IB教育アドバイザー 好事例共有シリーズ



2026年7月31日

高知県香美市立香北中学校
堀見 絵里沙

小中連携グランドデザインに基づく「探究の質」の追求： IBアンケートから見る生徒・教員の変容プロセス

1. はじめに

香美市立香北中学校は、香美市の山間部にある全校生徒78名の小規模校です。

本校では、校区内の大宮小学校(PYP認定校)と同じ学校教育目標「人間を大切にする～自分らしく 自分で動き 探究する～」を掲げ、義務教育9年間を見通した探究の学びを大切にしています。その実現に向けて、「小中一貫教育グランドデザイン(香北中学校区)」をもとに小中で連携した教育活動を進めています。

小規模校であるため、各教科は1名の教員が担当しています。今年度は全教職員の半数近くが異動となり、新たな体制でのスタートとなりました。そのため、校内では改めて「MYPとは何か」という基本的な考え方を共有することから始め、研修やチーム会を重ねながら理解を深めています。

こうした組織としての変化の中でも、生徒の学びがどのように変わってきたのかを継続的に見取り、授業改善につなげるため、年2回「IBアンケート」を実施しています。

今回は、2024年度に1年生として入学した生徒たちが3年生となった2026年度までの3年間を振り返り、IB教育を通して見られた生徒の変容について紹介します。



小中一貫教育グランドデザイン

2. 生徒の変容

2024年度(1年次)と2026年度(3年次)のアンケート結果を比較すると、生徒の思考が「事実の確認」から「多角的な分析」へと深まっていく過程が見て取れます。

(1) 批判的思考スキルの芽生えと自覚化

・2024年度(1年次): 批判的思考スキルについて、「あまり考えていない」という回答や、肯定的な回答であっても、理由欄に「本当はどちらでもないです」と記述するなど、スキルの意味を十分に捉えきれていない様子が見られました。また、記述があったとしても「テストの計算の見直しをした」といった、単純な正誤確認の範囲に留まっていました。

・2026年度(3年次):「自分の意見を正しいと言えるように情報を集めたり、他者の意見を聞いたりしている」「国語の意見文でどのような反論が出るか想定しながら書いた」といった、根拠の妥当性を吟味し、多角的な視点を自覚的に活用する記述へと変容しています。

(2) 概念を軸とした教科横断的な学びの深化

・2024年度(1年次):教科間のつながりについては、「数学の計算を社会の時差で使った」など、具体的な技能の転用に関する記述が主でした。

・2026年度(3年次):

「『発展』という重要概念を社会と数学で扱い、どちらも人間が長い年月をかけて構築してきたという共通性を深く感じた」

「美術の『ものの見方』という概念が、国語の読解で他者の立場を考えることにつながった」

このように、目に見える知識だけでなく、抽象的な「概念」を補助線として教科をまたいで思考する姿が見られ始めています。

3. 教員の変容

生徒の変容に合わせ、教員もまた「IBの型をなぞる」段階から、学びのつながりを意識しながら柔軟に支援するようになっていきます。

・自律を支える環境設定:「単元内自由進度学習」の導入や、生成AI・インターネットなど「根拠を示せば自分に合う方法で情報収集できる場」を設定するなど、生徒に学びの主導権を譲る実践が報告されています。

・教科間の学びの連動:教員自身が「美術の授業において、古典の和歌、理科のボルタ電池、世界地理の地形などとのつながりを発見し、生徒へ価値づけして共有する」といった、教科の枠を越えて学びを結び付けることで、生徒の理解を深めるだけでなく、教員自身も新たな発見を楽しみながら学び続ける姿を、生徒に示すことができます。

4. 今後の課題

これまでの取り組みを通して、生徒や教員の変容が見られる一方で、今後さらに充実させていくための課題も見えてきました。以下のような課題も明確になっています。

1. 自己調整の個人差:3年生においても「ルーブリックを確認するのを忘れる」「振り返りの質を高める意識がまだ低い」とする生徒が一定数存在し、支援の継続が必要です。
2. ルーブリックの日常化:教員側からも「提示はできているが、生徒が内容を十分に理解し、活用できているかは不十分」という課題が挙げられており、活用場面の精査が求められます。
3. 概念的理解の転移:特定の教科では概念を意識できるものの、それを他教科へ自律的に転移させるには、まだ教員による意識的な働きかけが必要な段階です。

5. まとめ

3年間の学びの様子を見ていくと、生徒たちは少しずつ「指示を待つ学習者」から「自ら問いをもち、学びを振り返りながら進める学習者」へと成長している様子がうかがえます。一方で、この変容はまだ途上にあり、これからも学び続けていく過程にあります。今後は、小中共通のグランドデザインをもとに、ルーブリックを自分自身の学びを見つめる手がかりとして活用しながら、教科の枠を越えた探究を主体的に進められるよう、小中が連携して支援を充実させていきたいと考えています。